【優秀賞】南海放送賞

「心を開く」

今治市立北郷中学校　１年　八木　朝陽

私は、人に対して偏見を持ったり、見た目で判断したりすることはいけないことだと思っています。しかし、この作文を書くにあたってこれまでの自分を振り返ってみると、私自身が偏見を持っていたことに気が付きました。

その一つに外国の人たちのことがありました。私の住んでいる地域には、外国から働きに来ている人が多く住んでいます。近所に住んでいるので、スーパーマーケットや登下校中など日常生活の中でよく出会います。朝には、大人数で職場に行っているのを見かけます。また、休日などには大きな荷物を自転車に載せて、音楽を流しながら移動していたり、夜に集まって大きな声を出したりします。私は、その様子を見て怖いと思っていました。そして、怖いと思う気持ちから、道ですれ違ってもつい目をそらせてしまったり、挨拶をせず避けたりしていました。

去年の秋のことです。感染症対策のために数年間中止されていた町民運動会が、四年ぶりに開催されることになりました。以前と同じ規模で開催されるということで、私も地域の一員として出場しようと決めていました。しかし、ずっと中止だったためか、なかなか大人の参加者が増えず役員の人たちは困っていました。そんな時、地域の外国の人たちが自分たちも参加してよいかと訪ねて来てくれたのです。そのおかげでチームに必要な人数が揃い、無事に競技に参加することができました。外国の人たちはただ参加するだけではなく、朝から集合してジュースを配る手伝いをしてくれたり、終了後もテントの片付けを手伝ってくれたりしました。その様子を見ていると、とても礼儀正しくて優しい人たちだと思いました。外国の人たちもこの街に慣れて、自分たちから地域にとけ込もうと

がんばってくれているんだとも思いました。地域のおじさんが、
「こういう地域の行事があると、みんなのことが知れるからいいね。」
とつぶやいていました。私もその通りだと思いました。

この日がきっかけで、私は外国の人と朝会った時に自分から挨拶をしたり、スーパーマーケットで見かけたら会釈をしてみたり、少しずつ小さなことからコミュニケーションがとれるようになりました。

今まで「外国の人だから」という理由で、ひとくくりに「怖い」と勝手に決めつけていた自分を反省しました。「知らない」ということは怖いことだとも感じました。そして、私は「よく分からない」とか「知らない」ということから生まれる漠然とした怖いという気持ちこそ、偏見や差別であるということに気付きました。

最初は、地域のイベントや運動会に参加することは面倒だと思う気持ちもありました。しかし、年齢を問わず色々な人たちと話をする貴重な機会になり、これからも積極的に参加したいと思います。

差別や偏見は、外国の人たちに対してだけではありません。日本人でも服装やメイクの派手な人や高齢の人たちなど、自分と違っているからといって避けたり、白い目で見たりしたことがありました。しかし、この町民運動会での触れ合いを通して、差別をなくしていくために自分から心を開いて、お互いに分かり合おうとしていくことが大事だと思いました。

これからも私は、地域行事や日常のコミュニケーションを大事にして、様々な人と交流し自分の世界を広げていこうと思います。